

## 今村力三郎 没後50年 神田キャンパスで記念講演会

### 「法学教育の開明期とその発展」

今村力三郎・没後50年を記念して、10月16日に神田キャンパスで「法学教育の開明期とその発展」と題する講演会が開かれた。第五代総長今村力三郎は生涯、在野の弁護士を貫き、明治、大正、昭和の3代にわたり、数々の大事件に取り組み、常に民衆の戦いを理解して、時の権力と対峙した、わが国の誇るべき法曹である。当日は石村修教授(今村法律研究室長)の司会で、大谷正法学部教授と、辻達也元本学文学部教授が、専大の黎明期からの歩みを振り返るとともに、今村元総長のエピソードを紹介。聴講者とともに遺徳を偲んだ。法科大学院棟では、ゆかりの品々を展示した記念展が10月14～20日に行われ、出牛正芳理事長、日高義博学長、平井宜雄法科大学院長を始め、多数の見学があった。



自筆手紙や訴訟記録など貴重な展示品を見る出牛理事長。右は石村室長

### 激動の時代支える

専修大学と今村力三郎 1880年の創立から法学部設置まで

#### 法学部教授 大谷 正

今村力三郎は長野県の出身で、初期の専修学校法律科に入学。在学中の1888年(明21)に代言人(弁護士)試験に合格、同年9月に法律科を首席で卒業しています。短期間の裁判所勤務ののち、89年から弁護士として法廷に立ち、以後一貫、在野の人権派弁護士として活躍しました。

足尾鉾毒事件、大逆事件、虎ノ門事件、五・一五事件、帝人事件など、明治・大正・昭和の世間を衝動させた大事件の弁護を担当しています。

今村が入学の前後、専修学校の創設者たちは、苦心惨憺しながら学校経営を続けていたときで、建学の精神が確立した時期でもありました。

専修学校の卒業生からは優秀な人が出ました。1880年代の登録弁護士を見ると、専修学校の卒業生の比率が高い。それは教授陣が一流だったからですが、一方で専任教員を持たず、非常勤教員だけで安上がりな教育を行っていたという問題点があります。1889年(明22)憲法が制定され、翌年開会された議会で行革を可決。私法律学校卒業生の採用が難しくなり、志願者が激減したため専修学校は法律科の授業をやめたのです。

その後1918年(大7)、大学令が公布され、私立大学の昇格問題が起きます。実用教育を重視した創立者たちは消極的だったが在学学生、校友から大学昇格運動が起こり、そのあと法学部が設置されました。今村は2000円を寄付、運動の中心となり、以後大学経営に加わります。

専修大学の存亡の危機に際して、46年(昭21)総長となりました。

本学は開学から「実用高等教育」という理想を掲げ、社会の各方面で重要な位置を占める、非常に優秀な人材を輩出。また法律と経済を日本語で教える専門学校の先駆けをなし、教育界に新風を吹き込んできました。

しかし、そうした世に先駆けた歴史を有しながら、なぜ同じ私法律学校から生まれた大学に後れを取ったのか。大学昇格運動、法学部設置問題に対して、同盟休校と募金で促進を訴えた学生と校友の運動のエネルギーの源は何だったのか。創立125年を迎える今、もう一度、新たな視角から、校史の再検討が

必要ではないかと考えます。

今村力三郎・追想 ー在野精神の根底にあったものは

元専修大学文学部教授 辻 達也

私の母の妹が今村の息子に嫁ぎまして、私と今村とは親戚なんです。

力三郎は慶応2年丙寅の生まれで、私が1926年(大15)の丙寅ですから、ちょうど60歳違う。でも小学生のころは、彼はまだ現役で、「帝人事件」で活躍したことは、今でも覚えています。

あの頃、東京郊外の杉並の成宗で、広大な敷地の田舎家に住んでいて、親戚を集めて園遊会をやっていました。

今村は相撲が好きで、私もたびたび呼ばれて、学校のあった吉祥寺から直行しました。一番覚えているのは双葉山が69連勝した後、安芸海に敗けたのを2人で観ていたことです。間もなく戦争が激しくなり、今村も引退して修善寺に引っ込み、「再会」したのは54年(昭29)6月、専修大学の一角で亡くなったときでした。

父、善之助(東京帝国大学文学部教授)との関係で言いますと、今村が父に送ってきた文書が家にあります。「大逆事件」と難波大助の「虎ノ門事件」の弁護に当たって述べた意見で、25年(大14)に書かれた「芻言」と、その添書です。

「芻言」の中で、彼は、官憲が弾圧するから、かえって次々に恐ろしい事件が起こるので「原因は官憲の弾圧にある」という趣旨のことを主張しています。足尾鉬毒事件を告発し、天皇に直訴して被告となった田中正造と親しく、一緒に写した写真もあります。幸徳秋水とも親交があり、本人に獄中から依頼されて「大逆事件」の弁護を引き受けたと聞いています。

一方、熱烈な天皇の崇拜者でもありました。「法廷50年」の叙で「戦争放棄は至尊の御夙志と拝察する」と書いています。

もともと土豪の生まれでしたが、父の事業の失敗から、一家で上京して苦学します。ちょうどその前後に「群馬事件」「加波山事件」「秩父事件」などが起き、民衆が大弾圧を受けるわけです。今村自身は運動に加わっていませんが、彼の根底にあった在野精神は「自由民権運動」の精神を強く受け継いでいたのではないかと考えられます。

## 「専修大学125年史」編集進む

12月中旬刊行予定

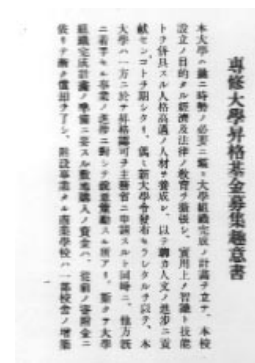
◇大正期の専修大学 在学生と校友の結束により1922年(大正11)「大学令」による大学昇格を果たした専修大学。当時の学園生活はどのようなものであったのだろうか。写真で紹介しよう。



▲関東大震災前の校舎(大正12年)



▲大正期の学生たち



▲大学令(大正7年)による大学への昇格運動起こる

◇専修帝国議会 創立30周年記念講堂で年1回召集された「専修帝国議会」は模擬国会。学生たちはこの中で、弁論術や政治感覚、法知識を養っていったという。

◇部活動も盛んに 校地・校舎が拡充され、教育内容が充実してきたこの時期には、乗馬・柔道・山岳などのスポーツ活動や弁論・マンドリンといった部活動も活発になってきた。



▲模擬国会「第4回専修帝国議会」大正11年



▲マンドリン部の演奏会(大正時代)



▲乗馬クラブ(大正時代)



▲蹴球部は昭和5年からこのジャージを着用した

【ニュース専修2004年11月号6面】